

PFF 40th

PIA FILM FESTIVAL



第40回 ぴあフィルムフェスティバル

YOU IHA
IIKAI?

第40回 PFF 公式カタログ2018
PIA FILM FESTIVAL

『愛讃讃』

2018年/カラー/8分

監督：池添 俊／音楽：Hakobune／整音：松野 泉

出演：上野伸弥、朱 芸然

あらすじ

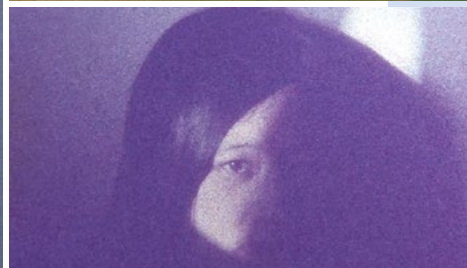
忘れられないあの人の言葉が
何度もリフレインする

地元へ帰省した27歳の男の記憶にふと甦る美しい継母の姿。母と呼べず、お姉ちゃんと呼んでいた彼女の言葉と姿が何度も想い出される。デジタル映像と期限切れの8ミリフィルムに刻印された元義母との追憶メモリー。

推薦文

記 憶はいつだって愛らしく残酷だ。あの日見た景色や、胸を打たれた映画の台詞でさえ、時を経て自らを蝕む呪いへと変わってしまうこともある。地獄の池のような鍋や、キッチンでスプラッター映画を見ながら食事をとる姉の唇は、もしかすると赤色じゃなかったかもしれない。本作で私たちは、一人の人間の内的な体験でしかなかった記憶が、まるでフィルムの切れ端を繋ぎ合わせるかのように再編集され、新たな記録として再構築されていく姿を目撃する。人間の情念に満ちた哀しみの追想は、現実と虚構が混ざった芸術に昇華された。まさに甘美な夢のよう。

(映画会社社員) 尾形友利亜



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

自分が大学生の頃、吐き出さなくては潰れてしまう焦燥感に駆られ、初めて映画をつくりました。出来の悪いその物語を、観客の方々に見ていただいた時、人生や考えに照らし合わせて感想が返ってきました。自分の想いが形になり、他人と関わりを持てた瞬間でした。その感動が忘れられません。今はその時ほどの焦りはありませんが、自分を深く見つめ直し、物語と対峙した結果、出来上がったのが今作です。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

映画をつくる時、自分の過去のヴィジョンと現在のイメージーションが邂逅し、出来たものは未来になります。今描いている物語に自分の大事に想う人や大切な人間を巻き込んで映画はつくられていきます。そして、その人の繋がりは数珠繋ぎのようになり、今の自分の人生があります。正直それで自分の人生が良い方向か、悪い方向に行っているのかはわかりません。ただ、映画は自分の人生のうねりの中で中心に位置するものになりました。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

思い入れのある人を、思い入れのある場所で撮る。それはフィクションでもドキュメンタリーでも変わらないと思います。自分がピンとこないものは観ている方にも伝わらない。逆も然り。話は逸れますが、私は絵を描きます。大体はポートレートで、自分の会ったことのある人か、その人物を実際に前にしてしか描きません。その人の匂いを直接作品に反映していく。そうすることで実感の伴った作品となります。映画も同じだと考えます。



監督

池添 俊

Shun Ikezoe

1988年生まれ、大阪府出身。大阪教育大学入学後、映画研究会サークルに入ったことがきっかけで映画づくりを始める。現在は、フリーランスで映画やドラマの演出を行う傍ら、自身でもフィルムやデジタルで作品づくりを行っている。

Q4. 好きな映画監督は？

相米慎二、ツイ・ミンリヤン

『ある日本の絵描き少年』

2018年/カラー/20分

監督・脚本：川尻将由／キャラクターデザイン：奈岡佳範、吉川健司（NPO法人かうんと5）／デザイン・作画：大村耕平／実写監督：岡田真樹
出演：上原剛史、矢島康美、あべけん太、石井佳子

あらすじ

夢を諦めないすべての人へ！
一枚の絵が人生を変える

漫画家になる夢を諦めかけた時、シンジがふと目にした幼なじみのマサルくんの絵。それが彼に勇気を与える！アートの力を信じ続けるクリエイターと、夢を諦めないすべての人への賛歌が込められた感動のアニメーション。

推薦文

技

術的な手法は決して新しいものではない。しかし、これまで観たこともない表現方法の斬新さに、大いに驚かされ、強く惹かれていく。少年が、成長していく過程で、その時々を描いた自身の絵。それが、キャラクターとなって動き出した時、母親の語りとともに少年の生命の躍動を感じるようになる。一人一人の人生は確実に動いていて、それぞれ異なる彩りをもっている。本作は、スクリーンを通して、視覚的にもそんなことを再発見させてくれるはずだ。これは、人生を描いたアニメーションであり、人生を映し出した類稀なる人間ドラマである。

(映画イベント主宰) 神原健太郎



Q1. なぜ映画をつくろうと思ったのか？

子供の頃から日曜洋画劇場などを見ていて、たった二時間で他人の人生を追体験できる最も優れた娯楽だと思い、自然に自分もつくりたいと思うようになりました。その中でアニメーションを選んだのはジブリ作品はもちろんの事、原 恵一監督作品などにある、リアルに表現される人物描写などが、実写とはまた違った快感があって惹かれた事と、未だに実写映画よりも開拓できる演出や表現が沢山あると思いアニメーションの道に進みました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

映画監督という夢は年齢を重ねる度、叶わないと浮かばれない呪いのようなものになりました。エゴだけ肥大化して、批評家気取りで映画を見ては、じゃあ自分はまともにつくれているのか？というブーメランな毎日でした。自分のやりたい作品を完成させる時。関わった人に少しでもいい変化が見られる時。このようなことがあって、やっとこさ自分は並みの人間になった気がするというのが正直な気持ちです。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

フラストレーションを持つことや、倒すべき仮想敵を持つことだと思っています。自分の場合、既存の作品に対して、何故これをつくらない？ 何故この感情を表現しない？ 何故深夜アニメには美少女しかでてこない？ なんて苛立ちからスタートします。インターステラーでも言っていましたね「怒れ、怒れ」って。映画のフロンティアも怒りから見つけ出されるものだと思っています。



監督

川尻将由

Masanao Kawajiri

1987年生まれ、東京都出身。大阪芸術大学在学中、原 恵一監督作などに影響を受け、アニメーション制作を志す。アニメスタジオに勤務後、映像制作会社を起業。主な作品に『ニッポニテスの夏』(09年)、『ステラ女学院高等科C3部』(13年)など。

Q4. 好きな映画監督は？

ポール・トーマス・アンダーソン、原 恵一

『一文字拳 序章』——最強カンフー少年対 地獄の殺人空手使い——

2018年/カラー/66分

監督・脚本・撮影・編集：中元 雄／助監督：飯星盛大、寒川亘揮／撮影監督：江森聖弥／録音：寒河江綾根

出演：茶谷優太、白畑 伸、倉田恭平、小矢菜奈美、大屋 峻

あらすじ

火傷も生傷も上等！体を張った本気アクションを見よ

最強の武術家を目指す一文字ユウタが見参。無敵の改造人間に挑む！アクション×スプラッター×80年代青春ドラマが融合。最後はお約束、NGテイクのおまけつきのマジでガチなアクション・エンターテインメントがここに。

推薦文

役 者のキャラクターへのハマリ具合がお見事。とりわけ茶谷優太演じる、自分の強さに驕らず常に謙虚、それでいてはにかみ屋な一面も併せ持つ愛らしいキャラクターは、カンフー映画のヒーローとして完璧だ。頭脳と身体、伝統とオリジナルなど、二元論で割り切れない要素が張り巡らされるストーリーの中、ユウタが「オリジナルは足し算だ」との考えに至る場面は感動的だ。ジャンルと監督本人のものであろう悩みが融合した本作についての言及にもなっているからである。脚本、編集、撮影まで手掛けて、このスケール感。再来年くらいには、この監督は制作費10億円の映画を撮っていると勝手に予測しておきます。

(映画監督) 安川有果



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

答えは単純明快！ そう！ 映画が大好きだからだ！ 幼少期に金曜ロードショーなどで『バック・トゥ・ザ・フューチャー』『ターミネーター2』『酔拳2』などの娯楽映画を観たことがすべての始まりだった…。その後、俺はジャッキー・チェンやブルース・リーに憧れ、友人とカンフー映画のマネをしたり、それをカメラで撮影したりといった少年時代が、あれよあれよとまだこの年になっても続いているわけなのだ！ 正気の沙汰とは思えん！

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

地元に住た頃は、IT系の会社でデザイナーとして働いていたが、何も考えずゾンビのように過ごす毎日だった。ある日「俺の人生…このままでいいのか!？」と思い立ち、4年間働いていた会社に辞表を叩きつけバイクに跨がり関東までやってきたのだ。そして何本も映画をつくり、ついにPFFの入選までこぎつけた！ あのまざつと地元で働いていたら毎日残業続きで本当にゾンビになるところだった。ロメロもびつくりだ。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

映画づくりで大事な要素…脚本…撮影…編集…否！ それは「仲間」だ！ 漫画は1人でも描けるし、ゲームや音楽も1人で作れるだろう。だがしかし！ 映画だけは一人ではつくれないのだ！ いくら面白い脚本を書いても役者やスタッフが居なければ映画は撮れない！ さらに俺の映画は地獄のような撮影が多いため、友人たちが何故ついて来てくれるのか不思議でしょうがない。みんなありがとう！ いつか有名になったら廻らない寿司食へに行こう！



監督

中元 雄

Yu Nakamoto

1991年生まれ、広島県出身。中学時代からジャッキー・チェンのオマージュ映画の制作を始める。一度就職するも、夢を捨てきれず上京、現在はWEBデザイナーの傍ら、専門学校で映画制作を学ぶ。主な作品に『DEAD COP』(17年)、『怪しい隣人』(18年)。

Q4. 好きな映画監督は？

ジャッキー・チェン、坂本浩一

『オーファズ・ブルース』

2018年/カラー/89分

監督・脚本・編集：工藤梨穂／助監督：遠藤海里／撮影：谷村咲貴／録音：佐古瑞季／照明：大崎 和
出演：村上由規乃、上川拓郎、辻 風子、佐々木詩音、窪瀬 環

あらすじ

思い出を忘却する前に少女は大切な友の姿を追求める

記憶が欠落する病を抱えるエマは行方不明の幼なじみのヤンを友人らと探しに。その存在と大事な思い出が消える前に彼女の再会の願いは叶うのか？ 失われゆく記憶に嘆き苦しむ少女の切なる叫びが聴こえるロードムービー。

推薦文

記憶の真ん中に還っていく少女と、彼女を繭のように包み込もうとする少年の旅。この映画は、「忘れる」ことへの抵抗を試みている。こぼれていくエマの記憶は、書きとめても書きとめても、すくい切れない。記録し、失くし、探す。たえず反復を繰り返す主人公たちのリズムは、こちら側へと波紋を投げる。そう、問いかけなのだ。「愛着のあるものが変わっていくのに、気づいていないでしょう？ まるで最初から無かったみたいに」でも、わたしの好きな歌を、あなたが覚えていてくれる。そんなめぐりあいもあることが、とても温かく、希望だ。

(映画館スタッフ) 佐藤杏奈



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

高校二年生の時に、西加奈子さん著「さくら」を読み、今までに感じたことのないほどの感動を経験し、そして、同時にこの感動を誰かと同じ時間、空間で共有したいと思った。その時に映画という表現方法が頭に浮かび、映画の道に進むことを決めた。

今、映画をつくりと思うのは、まだ誰も見たことのない光景を映し出したいし、それを一緒に観たいと思うから。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

変わったと思う。自分自身、文章を書くような個人的なもののづくりのほうが向いていると思うが、集団制作でしか得られない高揚、苦勞、感動が映画づくりにはある。だから向いてなくても、どうしても撮りたくなってしまう。理解のためにしか共存を許されない言葉が求められる世の中で、そうじゃない、はみ出したものも生き延びられる世界が映画にはあると気づいてから、私の根底には常に映画があるように思う。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

なによりも組全員の熱量。現場には十数人のスタッフがいる。ただ彼らが画面に映ることではないし、彼らの声が聞こえることもない。しかし、俳優もスタッフもあの場で一緒に呼吸をしていたと思えることが作品を質のあるものにするのではないかな。監督が一番偉いとかスタッフより俳優が上とかいうヒエラルキー的なものは、作品にとって無意味。俳優もスタッフも作品を作る共同体として、一個人として等しく共存すること。



監督

工藤梨穂

Riho Kudo

1995年生まれ、福岡県出身。高校2年生の時に、西加奈子の小説「さくら」に感動し、いつか映画化したいと映画の道を志す。京都造形芸術大学入学後、『サイケデリック・ノリコ』(15年)、『サマー・オブ・ラブを踊って』(16年)を制作。

Q4. 好きな映画監督は？

レオス・カラックス、ウォン・カーウアイ

『からっぽ』

2018年/カラー/52分

監督・脚本・編集：野村奈央／撮影：酒井 馨／録音：佐藤 仁、齋藤瑞紀／絵：松田有人
出演：打越梨子、カワチカツアキ、須田 暁、木村知貴

あらすじ

取り柄のない平凡な私という 存在の耐え難いやるせなさ

いくつものアルバイトを首尾よくこなすが、自身の凡庸さを自覚するまちは、我が道をいく画家と出会い、痛感する。私は「からっぽ」と。存在意義を見い出せない人間の苦しみを伝える一方で、それを優しく肯定する現代劇。

推薦文

PFFの審査基準は「才能」。ひとえに才能といってもさまざま。現代劇ならではの視点、物語を媒介にした季節の発見、描写力、構成力、編集力…野村奈央監督の『からっぽ』には、その全てに弾力があつた。総じて、映画の魔力が弾けていた。52分間、一秒も飽きなかった。審査のために2回見て、3回目は自分のためだけに見た。審査員の立場を放棄した僕は、ただ食欲に映画をほしがる観客になっていた。『からっぽ』は、観客席を創造する映画だった。観客の情緒だけが、主人公・まちの肖像をスクリーンに描くことができる。これこそ映画の才能だと思った。

(映画館スタッフ) 小原 治



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

そそのかされてつくってみたら、ものすごいダイヴ感で、今日まで来ました。正直でいられる場所で泳いでいる感覚で、たまに飛び上がった時の水しぶきが、誰かの頬をかすめたら良いな、と思います。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

わからないけれど、撮れた！という時のお酒はおいしいです。減多にないんですけど、基本落ち込んでいるんですけど。映画やっていても、いなくても人に迷惑をかけまくっているし。でも、そのようなまい酒には、映画をやっていなかったら出会えなかったと思います。人生であと何度かそんなお酒を皆さんと飲めるように、日々精進していきます。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

正直でいることだと思います。私にとって映画は、唯一正直でいられる場所なので、こちら側も絶対に裏切りたくないし、頑張っても裏切れることは出来ません。あとはやっぱり、人を撮っている、ということが大事です。生きている、生きていく、いま、いま生き続けている人間の芝居を、生きていく続ける私たちが撮ることで、生まれていく映画世界が好きです。と思いました、出演者がみんな死んでいたらどうなるのだろうか。は、着想を得ました。



監督

野村奈央

Nao Nomura

1994年生まれ、東京都出身。18歳の頃に出会った知人に、脚本執筆を勧められ、書いているうちに監督、編集も行うように。武蔵野美術大学に通いながら、フリーランスで映像監督をしている。監督作に『道子、どこ』（16年）。

Q4. 好きな映画監督は？

特になし

『カルチェ』

2018年/カラー/70分

監督・脚本・編集：植木咲楽／撮影：仲村逸平／録音：片浦 溪／照明：松本奈々／プロデューサー：高橋功人
 出演：高橋彩音、木村知貴、兵藤公美、吉井 優、石上佳寿祈

あらすじ

人間の生(出会い)と死(別れ)
を見つめるSF的寓話

トウキョウ3区のプールから誕生する純粹無垢な生命体。人間に育てられた彼らはどこへ還るのか？ 寓話のような異色の設定で、人間の生と死から輪廻転生まで感じさせるSF。実力派、木村知貴と兵藤公美の演技も味わい深い。

推薦文

人は突如いなくなってしまう。その突如—それは災害のせいだったり、事件だったり、その人の意思かもしれない—が訪れた後、私たちは日常に取り残され、見つけ出すことも心を切り替えることもできず、そこから進めなくなる。『カルチェ』は、そういう人たちのための映画だ。突如糸を切られ、その糸の先を見つめることしかできない人たちに対して「もしも」の世界を与える。それは可能性であり、妄想であり、救済である。フィクションの世界がフィクションの映画によって構築されていることが素晴らしく、そしてこのひとつの優しい可能性を、残された人たちに贈りたい。

(IT企業社員) 青木希羅



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

小さい頃から物語を空想することが好きで、夜、就寝前に第二人に創作した物語を話すなどをしていました。中学校、高校で小説家を目指したのですが、一人で机に向かうことや自分のみの想像力だけでつくりあげることが心が折れ挫折しました。高校二年生の時に、文化祭の出し物で映画をつくることになり、監督を担当し、沢山の仲間に参加してもらいながらのモノづくりに目覚めました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

175度ほど変わったと思います。高校生まで自分のことは大人しい方だと思っていたのですが、「私は意外と気が強かったのだな」と気付きました。表現は自分と向き合うことだと思っているので、自分の嫌な部分にもたくさん気付くようになりました。最近、「映画人として良くありたい」ということと「人間として良くありたい」ということを考えています。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

最近、「怒りと疑問」なのではないかと思っています。何かに対して「それはおかしいのではないか」と感じたら「じゃあ、どうしたら良くなるのだろう」と考えるようになります。感情が動かされることによって思考が始まり、物語が生まれるのです。満足してしまったり、もう前進することが出来なくなってしまうような気がするのです。世の中に対して不感でいたくない、ずっと興味を持ち続けていたいと思っています。

撮影現場で大事なものは体力と根性だと思います。



監督

植木咲楽

Sakura Ueki

1995年生まれ、大阪府出身。高校2年生の文化祭で、クラスで映画を撮ったのをきっかけに映画制作に興味を持つ。京都造形芸術大学に入学し、『ハレとケ』(16年)を制作。現在は、助監督として映画制作に携わっている。

Q4. 好きな映画監督は？

石井裕也、ラッセ・ハルストレム

『川と自転車』

2018年/カラー/44分

監督・脚本・撮影・編集・録音：池田昌平／車関係：大野政光、池田ルリ、根井大介

出演：大野政光、池田ルリ、賀来庭辰、神谷浩実、橋倉 彩

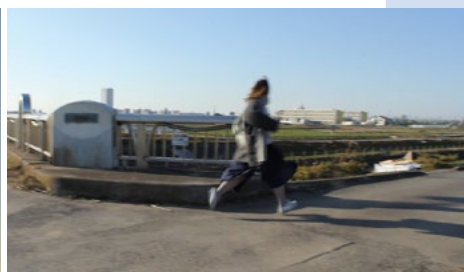
あらすじ

大胆な演出が光る3話形式の
リバーサイド・ストーリー

河川敷を散策する男女をユーモアたっぷりに描く3話のショート・ストーリー。クロスアップと説明過多な作品が多数を占める映画の現状に抗うがごとく、ロングショットの多用とセリフを排した大胆不敵な演出が心憎い。

推薦文

なぜ監督が『川と自転車』というタイトルをつけたのかはよくわからない。でも「川」と「自転車」を結ぶよくわからない関係性を示す「と」のようなもので、劇中に出てくる2組のカップルもまた結ばれている。どちらの男女も一言も口をきかず、特になにもせず（と書くしかないが、とにかく彼らから目が離せない!）、川べりに佇むだけ。そして彼らはどちらも結果的に、うっかり無くしたなにかを見つける。たぶんこれを見終えた観客もなにかを見つける。それは彼らのようにありふれた光景の中で無くしていたものかもしれないし、あるいはひょっとして、かつて見たこともなかったなにかかもしれない。

（ライター・映写技師）**結城秀勇**

Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

わかりません。最近、自分は本当に映画が好きなのか、ってことさえ悩んでいます。映画館の座席についても早く上映が終わらないかということばかり考えています（もう10年来）。たぶん自分は本当には映画が好きではないのでしょうか。なぜ映画をつくったか？ あわよくばディレクターズ・チェアでふんぞり返ったり人に褒められたりちやほやされたり、そんなことがしたかったに違いなく、……つまらないことを書きました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

変わりませんでした。自分の生活は暗く、退屈なままです。自分は身勝手な人間ですので映画をつくっている時できた数名の協力者は皆離れていきました。ひとりでは映画はつくれないのでもう多分つくこともないでしょう。前述の通り自分は映画が好きではなく、映画だっこの私を好きではないに違いありません。映画を好きになりたいという気持ちはあるとは思いますが……、またつまらないことを書いてしまいました。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

わかんないです。自分（及び協力者たち）のつくったものが「映画」と断言できないので。……こんな事ばかり書いてると余程ひねくれた者のように思われるでしょうが、その通り、私はひねくれ者です。最近首の骨がひねくれてヘルニアになり、何年前には右上腕骨が同じくひねくれて粉砕骨折と相成り、チタン製のボルトが1年埋めこまれていました。どうせなら消化器がひねくれて食欲が減り、ダイエットできればねえ！



監督

池田昌平

Shohei Ikeda

1984年生まれ、千葉県出身。

Q4. 好きな映画監督は？

特になし

『貴美子のまち』

2018年/カラー/37分

監督・脚本・編集：芦澤麻有子、プロデューサー：Vivienne Chongh／撮影：Jeremy Jahaziel、茅嶋直大／美術：Narissa Aroonkamonsri
出演：TAMAE、内海 敦、米倉 愛、櫻堂美夏子、原 啓太

あらすじ

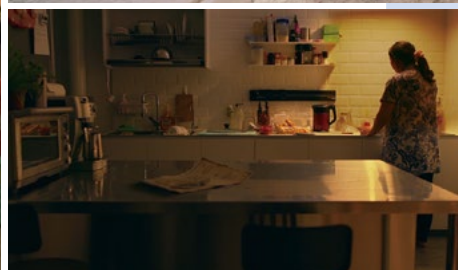
パート主婦の貴美子、シンガポールで脱日常の冒険へ

せっかく作った食事に手を付けない日が多くなった夫と娘に不満を抱く貴美子は、友人とシンガポールへ。平凡な主婦から突如飛び出す脱日本&脱日常宣言。異国の地での不思議体験がのちに家族の食卓に変化をもたらす！

推薦文

「一口でも食べてくれたらいいのに…」パートの同僚に愚痴る主婦、貴美子が全編にわたってとにかく愛おしく、家族への不満が積み重なった貴美子の想いを軽やかな語り口で描くこの作品は、切実でもあり、シニカルでもあり、滑稽でもあり、何とも不思議な映画の色気に満ちている。シンガポールの海外ロケに気負いもせず、冒頭とラストの家族の食卓をみつめる監督の視線は、とてつもなく力強く優しい。物語に必要なカットを積み重ねた、37分とはとても思えない壮大なこのロードムービーをたくさんの人にスクリーンで堪能してもらいたい！

(レンタルビデオ店スタッフ) 原 武史



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

四角いフレームの中で表現される出来事を誰もが同じだけの情報量で鑑賞し、共有出来る映像というメディアそのものに興味を持ったことがきっかけでした。大学に入学してからは映画と並行して演劇の活動も行い、「お芝居」と対峙する距離感について多くを学び、映画というフィールドを選びました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

私にとって映画とは、実体験や日々感じること、偶然出会った出来事などを映画に落とし込み昇華させて行くという行為で、そうやって自分から切り離された「自分」の断片を鑑賞することで自分自身がまた新しい発見をすることができました。自分と映画の距離が近いからこそ、日々を愛おしく見つめることが出来るという点で、私の人生は少し豊かに変わっていったように思っています。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

「伝えたい人に、ちゃんと伝わるようにつくる」ことだと思います。私自身が映画に救われたり元気づけられたように、私も誰かの心に寄り添いたいと思っています。私が元気づけたいと思うどこかの誰かの生活にほんの少しでも関わる事が出来たらその映画は存在することに意味が生まれるし、その思いが無くならない限り私は映画をつくり続けたいと思っています。



監督

芦澤麻有子

Mayuko Ashizawa

1995年生まれ、神奈川県出身。高校1年生の時、行定 勲監督の特別講義を受けたのをきっかけに、武蔵野美術大学に進学。『卵と牛乳とたらこ』(16年)、『君のシャツ、私の靴下』(18年)などを制作。本作は、日本とシンガポールの2チームで撮影を敢行した。

Q4. 好きな映画監督は？

オタール・イオセリアニ、三木 聡

『Good bye, Eric!』

2018年/カラー/18分

監督・脚本・撮影・編集・録音：高階 匠／撮影：小山駿助／録音：澤田栄一

出演：宮田宮太郎、Eric McEver、関 直軌、清水洪軌、内田早紀

あらすじ

真の友情に別れの言葉はいらない。さよなら、最愛の友よ

親友エリックとの別れの日。宮田は災難続きで待ち合わせ場所に辿り着けない。だが、そのトラブルがエリックとの思い出を脳裏に甦らす。喜劇仕立てながら実は王道の男の友情劇。珍道中の先に感動のフィナーレが待つ！

推薦文

晴れ晴れした気持ちになれる『Good bye, Eric!』！ドジョウのよ
うな寂しげな目がキュートな宮太郎。成田空港を目指す道すがら、大黒様風のモチ肌男に助けられて一件落着めでたしめでたし...と思いきや、彼の行く先々での親切が過ぎて、事態はどんどんややこしい方向へ。くじけそうになるたび映し出されるのは、親友エリックの横顔。彼の慈愛に満ちた表情がまた素晴らしく、それだけでもう心が震える。凄まじく魅力的な役者たちが教えてくれる、信じることの大切さ。心の汚れが綺麗さっぱり洗い流される人生賛歌のロードムービー！

(書店員) 杉浦真衣



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

高校生の時に観た何本かの映画に強い感動を受け、自分でも映画をつくりたいと思うようになりました。それは時に怪獣映画だったり、ファンタジー映画だったり、青春映画だったり、コメディ映画だったりしましたが、全てに共通していたのは「現実よりも面白いものを見つけた」という喜びを感じさせてくれた事でした。

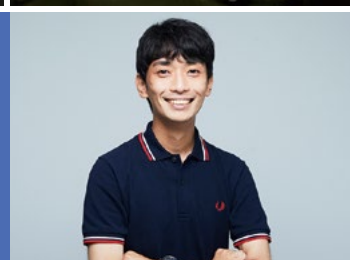
その時の感動が、現在も自分が映画をつくる原動力になっていると思います。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

特に「映画をつくる」ことで人生が変わったとは思いませんが、大学で映画研究会に所属し、友人達に恵まれた事はとても幸運でした。彼らは皆、个性的で、一人一人が独自の強い価値観を持っていました。そうした人達と出会い、影響を受けた事は自分にとって貴重な財産となっています。映画をつくること自体よりも、その過程で多くの人と交流できた事の方が自分の人生に大きな変化をもたらしてくれたかもしれません。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

映画は現実には勝たなければいけないと、自分は考えています。カメラで撮影された現実の風景や人物、絵や人形が、スクリーン上に現実よりも魅力的な世界として映るのが映画の醍醐味だと思うからです。企画からシナリオ、撮影、ポストプロダクションに致るまで、一貫して現実よりも面白いものをつくる為の工夫に頭を悩ませる事が、自分にとって「映画づくり」で一番大事なことであり、また一番楽しい部分です。



監督

高階 匠

Takumi Takashina

1989年生まれ、東京都出身。早稲田大学入学後、映画研究会に所属し、自主映画の制作を始め、『大怪獣シュラメック』(10年)を制作。大学卒業後も自主制作を続けている。現在は、ポストプロダクションを行う、制作会社に勤務。

Q4. 好きな映画監督は？

金子修介、黒沢 清

『最期の星』

2018年/カラー/27分

監督・脚本・編集：小川紗良／撮影：奥山大史／録音：浅井 隆／助監督：上野真之介、村岡ゆりあ
出演：小川未祐、渡辺優奈、井桁弘恵、佐倉 萌、日比菜那

あらすじ

女優としても活躍中の気鋭監督が綴る私から亡き人へ

誰も会ったことがない現在闘病中のさっちゃん。学校に居場所のない琴子が彼女へ抱く妄想はいつしか現実になる。女優の顔も持つ新進監督が自身の体験から綴った、一度も時を共有できなかった今は亡き「あなた」への想い。

推薦文

「一人きりで、誰の手も届かない、どこか遠く場所へ行こう」という願いが限りなく夢物語なのを私たちは知っている。それでも夢を食べるように、零れ落ちた流れ星を拾い集めるように生と死の狭間を浮遊するのは、そこに広がる宇宙にこそ、無限の希望が存在すると信じているから。二人でいれば絶対に幸福、なのにやっぱり孤独で、渋谷へ行く1時間を永遠みたいに退屈だと感じながら、何でもない今この瞬間に永続を求めてしまう。ラストの後姿が自然と作家の姿に重なった。悩める少女はついに自分自身の外へ抜け出し、そこに光を見出したのだ。

(映画会社社員) 尾形友利亜



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

もともと高校時代に文化祭や体育祭のドキュメンタリーを撮っていて、そこから映像づくりのめり込んでいきました。大学に入り、学校の枠にとらわれず自分で物語や演出をつくり上げていきたいと思い、映画を撮り始めました。また、高校時代から女優としても活動していて映画に出演することもあったので、その影響もあると思います。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

人生自体は映画をつくったくらいじゃ大して変わりませんが、人生に対する見方はだいぶ変わったと思います。例えばすごく辛い出来事も、はらわたが煮え繰り返るほど悔しいことも、大っ嫌いな人がいたとしても、全て映画に繋げることができるから面白いと思うようになりました。また楽しい時や幸せな時も、できるだけ鮮明なまま忘れたくないという思いが強まりました。全部映画にして笑えたら良いなと思います。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

準備した脚本や絵コンテに縛られ過ぎず、撮影現場の生の空気を楽しんでつくっていくことだと思います。現場に入ると予想外のことがたくさん起きて余裕がなくなりがちですが、そういう時こそスタッフやキャストをよく見て、現場でしか生まれない面白いことをうまく取り入れながら柔軟につくっていきたいです。初めて映画をつくった時の衝動や高揚を忘れずに。



監督

小川紗良

Sara Ogawa

1996年生まれ、東京都出身。高校生の時に学校行事のドキュメンタリーを撮り始めたのをきっかけに、早稲田大学入学後に映画制作を始める。主な作品に『あさつゆ』(15年)、『BEATOPIA』(16年)などがある。女優としても活動。

Q4. 好きな映画監督は？

大林宣彦

『山河の子』

2018年/カラー/57分

監督：胡 旭彤（コ・キョクトウ）／撮影・編集：鈴木総平／制作・編集：太田晋平／プロデューサー：上清水温子

出演：毛 正発、毛 勝智、趙 海龍、趙 天友、毛 銀峰

あらすじ

中国の片隅で懸命に生きる
子どもたちから世界の人々へ

都会から遠く離れた中国の農村部。そこで監督が目の当たりにしたのどかな風景に隠された村の厳しい現実とは？それでも前を向く子どもたちがふと漏らす切なる願い。その想いは世界の片隅で生きる誰かと重なる。きっと。

推薦文

『山河の子』には、人々の何気ない豊かな表情や声が、のびのび画面に満ちている。「貧しさ」の名のもとに子どもたちを一行に並べて残酷な善意をみせるメディアに抗って、本作は一貫して個人を尊重し、その固有性から現実社会を照らしていく。わたしたちは、そうして掬いあげられた人々の生の輪郭や感情の機微に触れて、その複雑さを抱きしめて、はじめてそこにある問題も立体的にとらえることができる。わかりやすい結末はここにはない。本作は、映画が終わったあとも、この世界を彼らと共に生きていくための「過程」の映画なのだ。

（中南米映画研究者）新谷和輝



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

大学二年生の時、講義でフレデリック・ワイズマン監督の「チチカット・フォーリーズ」を見て、そこで初めてノンフィクション映画の迫力を感じました。

私も真実を捕まえたいと、ドキュメンタリー映画に興味を持ちました。

そして、映画をつくる事で何かの答えを探すわけではなく、ただ生活の真実を記録し、本来の姿を捉えたいと思うようになりました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

もし映画をつくっていなかったとしたら、自分はどんな人になれたのか、今は何をしているのか、全く想像が付きません。映画をつくる過程で色々な物事に出会って、もっと広い世界に触れることができました。

そして、新しい自分にも出会えました。あるいは私が映画をつくるというより、映画によって私がつくられているとも言えるのではないのでしょうか。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

「安全」は大事だと思います。でも冒険してみる価値があれば、冒険した方が良いです。

ドキュメンタリーの現場では、一番大事なのび「観察」だと思います。

周りの状況に気を配り、取材対象者の心理的な変化に気づき、その後の展開を予想することが大切です。常に冷静さと客観性を保って、周囲を観察する必要があると思います。



監督

胡 旭彤

Hu Xutong

1995年生まれ、中国出身。日本映画大学のドキュメンタリーコースに入学。2年生の時、授業でワイズマンの『チチカット・フォーリーズ』を観て衝撃を受ける。現在は、テレビドキュメンタリーの制作会社に勤務している。

Q4. 好きな映画監督は？

フレデリック・ワイズマン、寺山修司

『シアノス』

2018年/カラー/40分

監督・脚本：松本 剛／撮影：川口諒太郎／録音：百々保之／編集：花塚祥太郎／音楽：丸山浩司
 出演：石川平武、森永さくら、大塚公祐、藤堂 海、高木悠衣

あらすじ

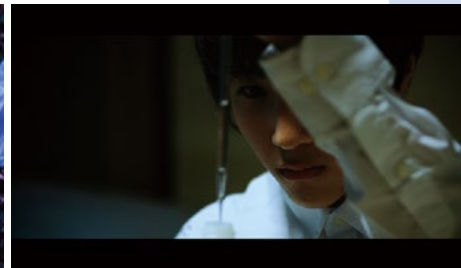
失踪した少女の最後の目撃者
となった少年に何かが宿る

平穏な片田舎に緊張が走る少女失踪事件が発生。自分の作り方なる不思議な動画をサイトにアップしていた彼女を最後に目撃した少年の身に異変が起こる。多感な思春期にいる少年の心に何かが宿り、乱れていくミステリー。

推薦文

手をかざすだけで人は消える。彼が単なる目撃者なのかどうかはよくわからない。大人になり都合良く書き換えられていた過去の記憶が、都合のいい形のまま、目の前に映画となって姿を現した感覚に陥る。失踪したのか、殺人を犯したのか、自分自身の中の少女を殺したのか、とにかく少女は消える。少女の作り方をYouTubeで学ぶ単純さと、消えた（殺した）ということが、ただ“手をかざす”という本当に小さな運動として記憶された時に、思春期という時代や人間というものに恐怖を覚える。

(映画監督) 五十嵐耕平



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

幼少期、父親とテレビで観る映画のロードショーは唯一夜ふかしが許された特別な時間でした。それから映画館に足を運ぶようになり、映画の中に何者かのまなざしを感じたとき、映画監督という存在を意識するようになりました。小学校の卒業文集に将来の夢は映画監督と書いてから映画をつくりたいという人格がひとつ確立されていたように思います。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

映画をつくるために島根県から上京したので、東京での友人、知人との間には必ず映画というものがあります。島根にいた頃の自分から見れば、今の人生は間違いなく狂っていると思います。

また、映画をつくり、それを客観的に観ることで自分の本性にも気付かれます。映画をつくることで、人生や環境だけではなく、自分自身も変化していることを実感しています。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

自分の生理に忠実であることだと思います。

映画制作では現実的な問題や自意識などさまざまなアクシデントによって、本来の目的を見失い、思考が停止して映画が小さくなっていくことがあります。それでも自分の生理に忠実であり続けられれば、どんな困難があったとしても、きちんと手垢のついた自分自身の映画ができていると思います。



監督

松本 剛

Tsuyoshi Matsumoto

1984年生まれ、島根県出身。小学生の頃から映画監督を志す。上京し、ENBUゼミナールに入学。修了後も、2年に一度のペースで自主映画を制作している。主な作品に、『グラビア』(10年)、『変態 -metamorphose-』(13年)がある。

Q4. 好きな映画監督は？

ポール・トーマス・アンダーソン、ウォン・カーウアイ

『シャシャシャ』

2018年/カラー/31分

監督・脚本：亀井史興／撮影：深谷裕次／編集：小林 望／録音：新井希望／美術：岡田明彩子
出演：亀井史興、磯村 央、中村夏子

あらすじ

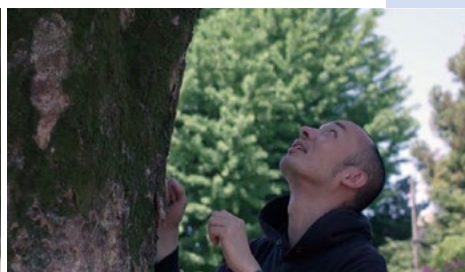
彼女との関係にピリオドを
打った男の切ない心模様

彼女との別れを決めた亀ちゃん。友との語らいと独り身のお気楽さは、それを一瞬忘れさせてくれる。でも、どこか気分は晴れない。失って気づくパートナーの存在の大きさ。そして一人になった男の心のつぶやきが切ない。

推薦文

人生は、楽しくて、悲しくて、切ない。だから時々、丸くなって眠りたいし、すべてを忘れて心のおもむくままに振る舞ってみたい。他人には理解しがたいけれど、自分はどうしても惹かれてしまうものがある。丁寧に使い込まれたヤカン、愛着のある食器、蛍光色のカラーボール、冷蔵庫に貼られたメモ、訪ねてきては他愛もないやり取りをする友人。人生は、そんなものたちの寄せ集めでできている。映画はそれを映し出している。人生は、楽しくて、悲しいから、美しい。二人であること、一人であること、一匹であること。これは、静かなる人生讃歌。

(フリーライター) 木村奈緒



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

2016年の年末にある舞台を観て感動した事。
恩人に役者のオファーがないのであれば、自分で何かやってみたらどうかと言われた事。
ある動作を自撮りしたら、意外と面白かった事。何気ない会話やちょっとしたきっかけが重なり、何か出来ないかな、と。しばらく経ってから、二つのシーンが浮かんだので、その二つを繋げるために脚本を書いて映画にしようと思いました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

色々な事を積み重ねたり、消えていってしまったり、終わりが来るまで止まる事なく流れている時間の中で、映画を作る事で人生が変わったのだろうか…
この数日、一生懸命考えていますが、よくわかりません。はっきりと言葉に出来ません。
そして自分の中に変わりたくない何かがあり、だからこそ映画をつくったかもしれません。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

一緒につくってくれる仲間です。
拙い脚本、演出でも汲み取って、表現してくれる役者の二人。
撮影、編集、整音、タイトルデザインを作業ではなく創作してくれるスタッフのみんな。
ある日の夜中に撮った動画、二つのイメージ。
それが映画として、形になったのは彼らがいたからです。一人では出来ません。
みんなに監督にもらったと思います。



監督

亀井史興

Fumioki Kamei

1981年生まれ、新潟県出身。役者として活動していたが、16年の年末に観た舞台に感動し、自身で脚本を書き、映画制作を始める。本作が初監督作品となる。現在は、派遣社員として働きながら、次回作を構想中。

Q4. 好きな映画監督は？

北野 武、ホウ・シャオシェン

『19歳』

2018年/カラー/28分

監督・脚本・編集：道本咲希／撮影・録音：三澤駿人
出演：道本咲希、黒川 恵、小野聖愛、塚本健之、大嶋夫婦

あらすじ

自分語りと自己分析から 浮かびあがる19歳女子の肖像

20歳を前に大人になる自信が持てない咲希が、自らの不安な心情をカメラの前で包み隠さず吐露。フィクションとノンフィクションの狭間を往来するような自分語りと客観的な自己分析で、19歳女子のリアルな肖像を写す。

推薦文

日常のスナップ写真に焼き付けられた、ティーンエイジのエピソード！ 過去も未来も儚く見える年齢だけど、いまを生きる姿は煌めき、永遠に勝っているのです。そんな魔法のような10代の放課後を激写した映像詩。観客をほんのりモラトリウムに引き戻しては、ちょっぴり大人の世界に近づけます。変拍子の演出技法に心を掴まれ、虚構の隙間から湧き出るリアリティに息を呑みました。たとえ半径1メートルの景色でも、ミレニウム世代の武器を捨て、面と向かって話して撮って、絶対無二の瞬間に昇華する、極私的センチメンタル・ジャーニーを共に！

(レコード会社社員) 長井 龍



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

現実の自分と周りの出来事が嫌で仕方がなくて、そこから逃げるためにつくり始めたんだと思います。映画を見ていたらこじやないどこかに行ける気がして、その感覚が大好きで、見るだけでなく映画をつくることができたらもっとなにか変わるかもしれない、となったんだと思います。あとは単純に面白い映画をつくることができたらかっこいいなと思ったからです。かっこいい人になったからです。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

人生が変わったかどうかはわかりませんが、毎日のちょっとした出来事が好きになりました。本を読んだり、人を観察したり、音楽を聴くこと全てが、映画づくりに通じることを知って、以前よりも楽しく感じるようになりました。あとは映画をつくってみて少しだけですが、自分を客観的に見れるようになりました。今までの自分がとても幼稚で自分のことしか考えていないことによりやく気がつきました。これは私にとってとても大きな出来事でした。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

かっこつけないことだと思います。せっかく映画をつくるんだから監督としてかっこよく見たい、と無理してかっこ良くしようとしても映画は面白くなりません。自分の中にないものはどう映画に出そうとしても出ないので、自分の中にあるもの、良いこと悪いこと関係なく素直につくることが大切だと思います。でも、わたしの19歳は私がかっこつけようとしたことが、かえって私の嫌な部分全てを出してくれたので、それはそれで面白いと思いました。



監督

道本咲希

Saki Michimoto

1997年生まれ、大阪府出身。中学生の頃から大好きだった映画をつくるために、ビジュアルアーツ専門学校大阪に入学。在学中に本作と、『昔の恋人』(17年)を制作。現在は上京し、予告編制作会社に勤務している。

Q4. 好きな映画監督は？

テオ・アングロブロス、ウディ・アレン

『すばらしき世界』

2018年/カラー/41分

監督・脚本：石井達也／撮影：鈴木陵佑／編集：小暮大智／録音：下村彩野
出演：團 悠哉、湯舟すびか、伊藤慶徳、金子寧々

あらすじ

大人の事情に翻弄され続けた
16歳少年の叫び届け！

16歳の優は母と二人暮らし。しかし、そこに再婚を決めた父が強引に介入し、彼の心は再び深い闇に覆われる。大人の勝手な都合に翻弄される子どもの傷心と怒り。それは監督が実体験した苦しみと悲しみの告白でもある。

推薦文

斬 新さや奇抜さとは距離は置き、よくある物語をよくある形で映画にする。特別な事はないように感じる。しかし、映画の中に繊細に編み込まれたいくつものディティールや、その被写体との距離、空間、視線が、確かな手触りとして立ち現れてくる。

実直で丁寧なひとつひとつのエレメントが、やがてかすかな優しさと共に少年の人生を形づくり、終わる頃には、誰のものでもないこの人たちの新しい映画なんだという感覚が訪れる。そして自分の人生も救ってもらったような気がする。

(映画監督) 五十嵐耕平



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

小さい頃、説明ができる人になりたくないみたいところがあったんです。なんであいつが足が速いのかってペラペラ説明できて、足の速いあいつと仲の良い奴より、俺は足の速くて無口なあいつになりたい!!とずっと思っていました。殆どの人がそうだと思いますが。その延長線で、自分にしかできないことをやりたいと考えるようになり、映画も好きだったので映画をつくりと思いました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

変わりました。

運命ってのは決まっていってそれに沿って生きていくんだぜみたいな考え方を聞いて、そんなの死んでやりたくないじゃんと思ったので、より一層変わったと信じています。映画学校で出会った数少ない人達はとても大切ですし、人生の中で出会えたらラッキーというような人にも出会えました。人と出会ったことが、一番人生が変わったと思う部分です。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

親が見たら爆笑するくらいに格好つけたようなことですが、自分と向き合うことだと思います。「肛門さらけ出せねえなら映画なんか撮んじゃねえ」と初めての授業で講師の監督が仰っていたのを今でも覚えています。とんでもねえところに来ちゃったと思いました、今なら分かる部分もあります。自分の恥部をさらけ出すのは必要だと感じましたし、どんな映画を撮るにしても、自分がどれだけクソ野郎なのかを知ることが大事なのかなと思います。



監督

石井達也

Tatsuya Ishi

1998年生まれ、茨城県出身。中学3年生の頃から役者を志すも、気付くと映画を撮りたいと思うようになり、東放学園映画専門学校に入学。年2本しかつくれない同校の卒業制作作品として選出され、本作が完成した。現在、次回作を構想中。

Q4. 好きな映画監督は？

カンパニー松尾

『小さな声で囁いて』

2018年/カラー/110分

監督・脚本：山本 英／脚本：山崎陽平／撮影：李 子瑶／編集：丹羽真結子／録音：織笠想真
出演：大場みなみ、飯田 芳、山崎陽平、中野目理恵、小倉 一郎

あらすじ

うまく将来像を描けない
若いカップルの「アイ」の行方

結婚を考え始めた遼に対し、乗り気じゃない沙良。互いの溝を埋めようとした3泊4日の旅行でも二人の心はすれ違えばかり。漠然とした将来への不安から未来像を描けない男と女。それぞれの「愛」と「I」が錯綜する。

推薦文

もう長いこと付き合ってきた。知らぬ間に移り変わっていった〈二人の季節〉にうまく歩調を合わせることが出来なくて、今では一緒にいても互いにひとりぼっち。そんな男女の憂鬱と「熱海」というロケーションが見事に響き合う。廃れたホテル、時代遅れのレジャー施設、気だるく揺れる椰子の木々。そこには物憂さと共に可笑しみがある。寂しさが愛おしさを招き入れる。言葉に出来ぬ恋心が「小さな声」を待ちわびる。そしてラスト。その永遠のような一瞬は〈熱海映画〉の新たな傑作の誕生をスクリーンに刻む。

(書店員) 杉浦真衣



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

高2の時、友達が映画を撮っていて、その手伝いをしたんです。人が足りないから僕も刑事の役をやったりカメラやったり手探りで何でもやりました。とにかく楽しくて、これは傑作だとみんな思っていたのですが、出来た映画は想像とは全然違って、映し出されていたのは演じていた刑事でも何でもなくて映画の外にあるわくわくしていた僕たちだったんです。その映し出されてしまった現実には惹かれたのが映画の始まりでした。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

変わったかどうかは自分では判断しづらく、また周囲からも変わったと言われることもあるし、全然変わらないと言われることもあるので、変化を比較する基準ってすごくあやふやな気がします。ですが映画を通してたくさんの人たちと接していく中で、自分を変えてくれる人もいれば変わった自分を引き戻してくれる人もいて、行ったり来たりを繰り返しながら歩んでいる感覚があります。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

誠意と関係性だと思います。映画は撮って終わりではなく、その後も僕たちは残り続けるので誠意のない映画は暴力になってしまう危険性がすごくあると思います。そこを疎かにしてしまうのであれば、映画は撮らなくてもいいと思います。関係性は誠意とも似ているのですがキャストにしろスタッフにしろ、それまで築いてきた関係が映し出されている映画はとて



監督 山本 英

Akira Yamamoto

1991年生まれ、広島県出身。高校時代に友人の映画制作を手伝ったのをきっかけに、東京造形大学に進学。在学中に制作した『回転(サイクリング)』がPFFアワード2016に入選。本作は、東京藝術大学大学院映像研究科の修了作品となる。

Q4. 好きな映画監督は？

ジャンタル・アケルマン、柳町光男

『モフモフィクション』

2018年/カラー/7分

監督：今津良樹
出演：秋元うらら

あらすじ

癒しが現実逃避か？ 人気キャラ、モフモフ動物出現！

そのキュートなルックスとふわふわの触り心地で人気を呼ぶモフモフ動物。この動物キャラクターは人びとの癒しか、それとも……。愛されキャラの紹介の先に現実逃避社会への皮肉も読み取れるシュール・アニメーション。

推薦文

あなたはモフモフした生き物が好きですか？私は大好きです。本作は、誰もが愛してやまないモフモフした生き物たちのお話。モフキリン、モフトカゲ、モフイヌ……モフモフした生き物は時に私たちを楽しませ、仕事を手助けし、健康維持にまで役立ってくれる。そんな光景はフィクションと銘打ちながら、どこか心当たりがあるような……。監督の鋭い眼差しと柔らかな発想、現実世界を二次元の世界に置き換える確かな技術から生み出された秀逸アニメーション。優美な音楽とナレーションに誘われる7分間のめくるめくモフモフショーへ、ようこそ！

(フリーライター) 木村奈緒



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

映画をつくっているというにはおこがましい作品ですが、スマホや動画サイトなどで、映像をながれ見できる昨今、映画館という映像と純粹に向き合ってもらえる場所はとても贅沢だと思っています。作品に集中してもらえ時間を考えた時、短い作品ですが、映像、音、全てを楽しんでもらえたらいいなという思いでつくっています。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

生活の中の身近なことから、抽象的な概念、感覚や知識、体験など、目で見て頭で考える全てのことがインプットと捉えられるようになりました。作品の構想を考えることが好きなので、不意に何か引っかけものに出会った時に、あれこれ立ち止まって考える楽しみが増えました。映画を見ることもより楽しくなりました。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

映像をつくる時において気をつけていることは、自分が面白いと思っていることを人と共有したいと思う気持ち、それを自信を持って伝えることだと思います。言葉にすると取るに足らないつまらないような事柄でも、映像にすることでコミュニケーションする意味が生まれることがあると信じて、不安との戦いですが、形にすることを心がけています。



監督

今津良樹

Yoshiki Imazu

1985年生まれ、静岡県出身。武蔵野美術大学を卒業後、7年間広告代理店に勤務。退職後、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻に入学。本作が修了作品。主な作品に『アトミック・ワールド』(09年)、『RINGING CITY』(17年)など。

Q4. 好きな映画監督は？

ジョルジュ・シュヴァイツゲル、ウェス・アンダーソン

『わたの原』

2018年/カラー/51分

監督・脚本・撮影・編集：藤原芽生／助監督：鹿出俊恵／録音：青石太郎／照明：芦澤麻有子／録音：岡田真由子
出演：村田奈津樹、大田 晃、安野由紀子、藤原亜美

あらすじ

仕事に人間関係に疲れた 現代ヒロインの心のリセット

富士山の麓にある田舎の母の実家でしばらく過ごすことにした蛍。今は誰も住んでない家の庭の手入れを無心でしながら、彼女は最近、自分に起きた出来事を振り返る。会社での人間関係に疲れ切った現代女性の心の再生物語。

推薦文

富 士山の麓の、いまは誰も住んでいない祖母の家にやってきた蛍は、夜、東京の母親に電話をかける。受話器の向こう側から雨音が漏れ出て聞こえて、「雨が見える」と彼女は言う。誰もいない場所で、遠く離れた映像のことを思う。遠く離れても、周波数を合わせればちゃんと音は聞こえて、音は映像を結ぶ。そうしないと見えないものもある。これは恋なのか、セクハラなのか。そんな問いにになってしまうこと自体がすでになんらかの暴力に加担することなのかかもしれない、人が時として愚かにも傲慢にもなりうる地点から遠く離れた静かな場所から、藤原芽生は映像を発信する。たぶん、それは愛についての映像なのだと思う。

(ライター・映写技師) **結城秀勇**



Q1. なぜ映画をつくりと思ったのか？

大学の4年間で、撮影や照明、制作、芝居をする側などいろいろな形で映画に関わり、その中で自然に自分も映画をつくりたいと思うようになりました。そして映像を通してなら自分の気持ちを伝えたり表現することができるかもしれないと思い、作品をつくり始めました。

Q2. 映画をつくることであなたの人生は変わりましたか？

映画をつくることというよりは、映画に関わることで、人生は変わったかもしないです。人との出会いや、知らない場所に行くことは発見がとて多いです。または人生を変えるために映画をつくっている気もします。

Q3. 映画づくりで一番大事なことは何だと思いますか？

情熱と同じくらい、頭を使って考えることが大事だと思います。速くで同じ気持ちでいる誰かに届けるために、どうやったら人に伝わるか諦めずに考える。そのために表現する方法を学ぶために色々な作品を見たいです。



監督

藤原芽生

Mei Fujiwara

1995年生まれ、東京都出身。高校時代から放送部の活動で映像を制作、武蔵野美術大学に入学し、映画制作を始める。監督作『ステージ』(16年)。現在は、CG会社で実写合成の3DCGデザイナーとして勤務している。

Q4. 好きな映画監督は？

勅使河原 宏

第40回びあフィルムフェスティバル タイムテーブル

当日券の販売は、上映30分前から開演時間(1本目の上映開始)までとなります。
上映がスタートすると、チケットの購入は出来ませんので、ご注意ください。

*日ごとに上映開始時間が違いますので、ご注意ください。 G…ゲスト来場予定。
*開場時間はPFFアワード(自由席)は**30分前**、その他のプログラム(指定席)は**15分前**です。

9.8 [土]	OZU	11:00～ PFFアワード2018 『Good bye, Eric!』 『一文字拳 序章』 ～最強カンフー少年対 地獄の殺人空手使い～	14:30～ PFFアワード2018 『カルチュ』 『貴美子のまち』	18:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『キスで殺せ』 アフタートーク:黒沢 清監督
	小ホール	10:30～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『ビッグ・リーガー』	12:15～ 追悼 たむらまさきを語り尽くす じっくり語ろう、たむらさんのこと Part1 対談 『Helpless』 青山真治監督、仙頭武則プロデューサー	15:00～ 追悼 たむらまさきを語り尽くす じっくり語ろう、たむらさんのこと Part2 対談 『EUREKA』 青山真治監督、仙頭武則プロデューサー
9 [日]	OZU	11:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『特攻大作戦』	14:30～ PFFアワード2018 『ある日本の絵描き少年』 『オーファズ・ブルース』	18:00～ PFFアワード2018 『わたの原』 『すばらしき世界』
	小ホール	12:00～ PFFスペシャル講座「映画のコツ」 吉田大八プレゼンツ「香川まさひとの世界」 対談 『青春』バスクリンナイト』ほか 吉田大八監督、香川まさひと監督	16:00～ 追悼 たむらまさきを語り尽くす 挑戦者たちよ! 柳町光男とたむらまさきに空族が迫る 対談 『さらば愛しき大地』 柳町光男監督、富田克也監督、相澤虎之助監督	
10 [月]				
11 [火]	長瀬記念ホール OZU	12:30～ PFFアワード2018 『からっぽ』『愛讃讃』 『シァノス』	16:00～ PFFアワード2018 『山河の子』 『19歳』	19:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『悪徳』
		12:30～ PFFアワード2018 『シャジャシャ』 『川と自転車』『最期の星』	16:00～ PFFアワード2018 『モフモフィクション』 『小さな声で囁いて』	19:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『攻撃』
		12:30～ PFFアワード2018 『カルチュ』 『貴美子のまち』	16:00～ PFFアワード2018 『ある日本の絵描き少年』 『オーファズ・ブルース』	19:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『合衆国最後の日』
		12:30～ PFFアワード2018 『わたの原』 『すばらしき世界』	16:00～ PFFアワード2018 『Good bye, Eric!』 『一文字拳 序章』 ～最強カンフー少年対 地獄の殺人空手使い～	19:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『枯葉』
		11:00～ PFFアワード2018 『モフモフィクション』 『小さな声で囁いて』	14:15～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『何がジェーンに起ったか』	17:15～ PFFアワード2018 『からっぽ』『愛讃讃』 『シァノス』
15 [土]	小ホール	12:00～ PFFスペシャル講座「映画のコツ」 原 恵一と橋口亮輔が映画の神髄を語る「天才・木下恵介は知っている・その2」 対談 『野菊の如き君なりき』『笛吹川』 原 恵一監督、橋口亮輔監督		18:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『クワイバボーイズ』
	OZU	11:45～ PFFアワード2018 『山河の子』 『19歳』	14:45～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『ふるえて眠れ』	18:00～ PFFアワード2018 『シャジャシャ』 『川と自転車』『最期の星』
16 [日]	小ホール	11:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『クワイバボーイズ』	13:45～ 追悼 たむらまさきを語り尽くす 山中瑠子氏が諏訪敦彦に聞く、たむらさんのこと 対談 『2/デュオ』 諏訪敦彦監督、山中瑠子監督	17:15～ PFFスペシャル講座「映画のコツ」 TVディレクターによる「本当にみたいテレビ番組制作術」 対談 『たけし誕生 ～オイラの師匠と浅草～』 稲垣哲也ディレクター、佐々木健一ディレクター
17 [月・祝]				
18 [火]	長瀬記念ホール OZU	14:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『何がジェーンに起ったか』	17:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『ビッグ・リーガー』	19:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『悪徳』
		13:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『キスで殺せ』	15:45～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『ふるえて眠れ』	19:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『枯葉』
20 [木]				
21 [金]		11:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『クワイバボーイズ』	13:45～ PFFアワード2018 受賞作品上映	17:00～ PFFアワード2018 受賞作品上映(準グランプリ含む)
		11:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『攻撃』	13:45～ PFFアワード2018 受賞作品上映(グランプリ含む)	17:00～ 女も男もカッコいい! 今こそアルドリッチ 『特攻大作戦』
22 [土]				

※やむを得ない事情により、プログラムおよび来場ゲストが予告なく変更になる場合もございます。ご了承ください。 ※ゲスト敬称略